

# きのこ色彩曼荼羅



左上から右へ 一列目：ダイダイイグチ、コンイロイッポンシメジ、ソライロタケ、オオムラサキアンズタケ。  
 二列目：ベニヤマタケ、アカヤマドリ、ヤマドリタケモドキ、ムラサキシメジ。三列目：サンコタケ、  
 チチアワタケ、カラカサタケ、カワムラフウセンタケ。四列目：クチベニタケ、クバナイグチ、  
 ハタケチャダイゴケ、ムラサキヤマドリ。五列目：チシオタケ、キタマゴタケ、キイボカサタケ、  
 シロオニタケ。六列目：アカヤマタケ、クリフウセンタケ、オオイチョウタケ、ウラベニホテイシメジ。  
 七列目：ショウロ。すべて博物館近郊の野山で見つかる、色彩豊かなキノコ達です。

秋山弘之(自然・環境評価研究部)

兵庫県立 人と自然の博物館  
 Association of Human and Natural History, Hyogo  
 Museum  
 hitohaku news paper

学びっ!  
 人と自然の応援情報誌 ハーモニー73号  
 23枚 2-006A3

# ひとはく新聞

2011/6/30号  
 平成23年  
 保存版

TEL:079-559-2001 (ひとはくの代表番号です)  
 TEL:079-559-2002 (学校や団体のご利用の方はこちらにおかけください)  
 TEL:079-559-2003 (セミナーやイベントなどのお問い合わせ先です)

〒669-1546  
 兵庫県三田市弥生が丘6丁目  
 兵庫県立人と自然の博物館  
 (兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)  
<http://hitohaku.jp>

## ひとはくが、昆虫少年を、応援しつづける理由

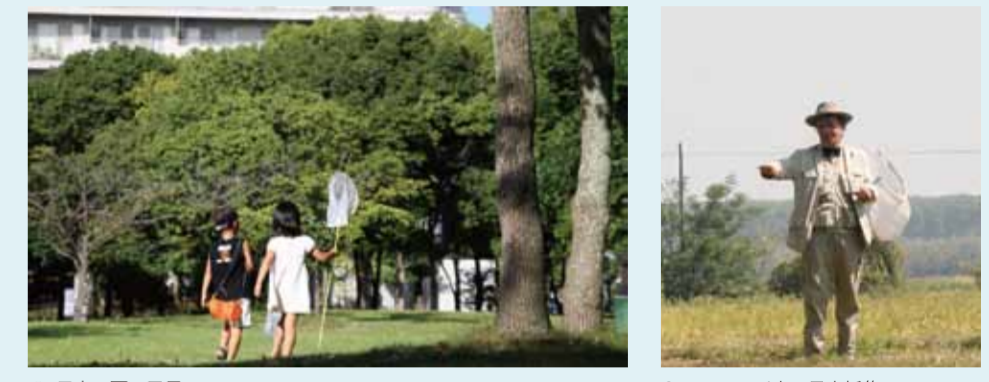
今年も、夏がやってきました。夏といえば昆虫の季節。日本の子どもたちは、夏になると、アミとカゴを持って、公園や野山を駆け回ります。昔も今も、当たり前のように見られる、ほほえましい風景です。

ご存じですか？ このような子どもたちの姿が見られる国は、地球上で、おそらく日本だけです。スーパー、コンビニ、いたるところで、虫とりアミやカゴが、安価で売られています。こんな国、どこにもないですよ。少なくとも、ヨーロッパでは、子どもたちは虫とりをしません。アミを持っているのは、ごく一部のコレクターか科学者です。小学校の教科書にも登場した「ファーブル昆虫記」は日本ではとても有名で、「ファーブル」はほとんど、昆虫少年を示す記号となっています。しかし、ファーブルの昆虫観察は、大人の科学者としてのもので、子どもの遊びではありません。

日本列島には多様な生物が生息しています。里山に代表されるように、自然と人は共存しており、古くから、ホタルを鑑賞し、虫の声を愛でる文化がありました。加えて明治時代、学校教育の出発とともに「博物」という教科ができました。これは、平たくいえば「生物の学習の基本は、観察であり、採集であり、さらに標本の作成である」という考え方です。以後、多数の副読本、雑誌、図鑑が出版され、少年たちを虜にしました。「昆虫記」が盛んに読まれたのもその頃です。昭和30年代までは、夏休み明けの学校は「昆虫標本のオンパレード」だったそうです。「昆虫採集は勉強」なのですから、うらやましい限りですね。

学校教育での「採集と標本作成」は、昭和30年代の学習指導要領の改訂で、「飼育と観察」に変化しました。自然保護思想の浸透もあり、少年少女の昆虫標本は、学校からしだいに姿を消しました。21世紀ともなると、身近な自然環境の破壊は進み、子どもたちは室内でテレビやゲームに興ずることが多くなり…と思いきや、虫とりは、現在も変わらず盛んです。夏の虫とりは、春のお花見のように、もはや文化の域に達しているのでしょう。

学校が昆虫採集、標本作成を奨励することはほとんどなくなりましたが、「生物の学習の基本は、観察であり、採集であり、さらに標本の作成である」という考え方が間違っていたわけではありません。「博物」教育の精神は、今もまさに博物館に生きています。学校だけが勉強の場ではありません。虫とり、昆虫採集は、「生物多様性」の時代にこそ重要な、立派な「勉強」です。



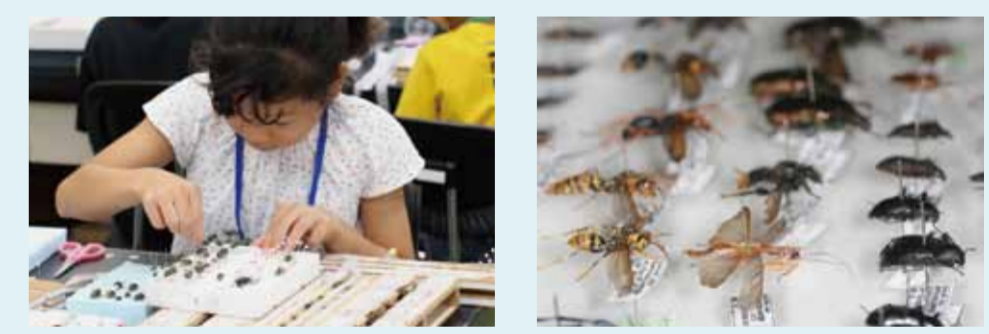
1. 日本の夏の風景  
 友だちと、兄弟姉妹と、家族で。日本では、小さな子どもたちも、夏になれば虫とりを楽しみます。(2010年8月、加古川市)

2. ヨーロッパ人の昆虫採集  
 ヨーロッパでは、子どもは虫とりをしません。蝶ネクタイを着て昆虫採集する人は、日本では見られないでしょう。(2008年8月、イタリア)



3. 昔の昆虫少年  
 制服に学帽姿。かつては、学校教育で、昆虫採集と標本づくりが奨励されていました。(『たのしい採集・標本のつくり方』昭和30年(1955年)発行)

4. 今の昆虫少年  
 ひとはく主催セミナー「ユース昆虫研究室」の中学生たち。学校も学年もを超えて、集まっています。(2009年6月、神戸市北区)



5. 標本づくりに取り組む  
 昆虫を整形するプロセスで、一匹一匹とじっくり向き合うこととなります。標本作成が学習の基本と言われるゆえんです。(2010年8月、ひとはく)

6. 中学生の標本  
 ここまでできれば、大人の研究者と変わりません。(ユース昆虫研究室2008の中学生の作品)

7月から開催の特別企画「ファーブルたちの夏〜昆虫の世界 2011〜」では、収蔵標本を多数公開するほか、昆虫少年・少女の姿を紹介します。夏、博物館に展示を見に行く場合ではないですが、ここへ来れば虫好きの少年・少女が自信を深め、わくわくする、そういう場にしたいと思っています。みなさんも、ぜひご参画ください。この夏の主役は、そう、あなたです。

八木 剛(自然・環境評価研究部)

服部 保  
 (兵庫県立人と自然の博物館 研究部長)

ひとはくコラム  
 博物館の展示

昭和63年11月1日に私は兵庫県教育委員会に採用され博物館の開設準備が本格的に始まりました。今から22年以上も前のことです。

兵庫県の博物館にとって展示の核となるのは郷土の自然です。兵庫県の自然の展示は私(一人)ではありませんが担当しましたが、基本的な方針として自分自身の研究を土台にし、多様性、交流、人と自然という切り口で展示を展開しようと考えました。その結果、多雪と少雨の兵庫、日本一の交流ルート・氷上回廊、日本一の里山・猪名川上流域、日本一の都市山・六甲、日本一のため池群・瀬戸内兵庫などの他府県にはない兵庫県のすばらしい特色を明らかにすることができ、またそれらを県民の皆様にお知らせできたのはたいへん幸せでした。私の照葉樹林、里山、六甲、ため池などの研究が展示につながり、また、その展示が県民や行政へのシンクタンク活動やジーンバンク活動への原動力となりました。自分の研究がこのような発展的につながっていったことも博物館員としてたいへん喜んでいます。